

客員部門にひたすら感謝

旧制御機構研究系情報制御研究部門・客員教授

和田 正 三

東京大学理学部の古谷雅樹先生の研究室で大学院生として、また助手として合計 12 年半お世話になった小生にとって基礎生物学研究所との関わりは長い。古谷先生が基生研の設立のために概算要求の書類の作成(?)や建設地の視察等々でご尽力されていたのを端で見ていたし、古谷研からは大型スペクトログラフの建設部隊として三好泰博講師と学位取り立ての渡辺正勝博士が岡崎に派遣されていた。時々その進行状況等も聞かされていた。スペクトログラフが完成すると、出来たてのスペクトログラフを使ってシダの光形態形成の実験をするために、何回となく基生研を訪れることになった。

その頃から約 20 年後、図らずも基生研の客員部門の教授にいただき、小生の研究人生はスッカリ変った。一言で言って、もし客員教授にしていなければ今の自分は無い。ただひたすら「感謝」である。

小生が 1981 年から 23 年余勤めた東京都立大学理学部(後の大学院理学研究科)生物学科のスペースは最悪だった。東急東横線都立大学駅から歩いて 15 分程度の深沢地区の古い校舎では、小生の研究室は、助教授、助手、大学院生などが居室兼実験室として使用していた 48 m²の部屋と、初期のころは、雨が降ると入り口前が水浸しになって入れなくなってしまうような、温室脇の別棟の一部屋を小さな 5 室に間仕切って改造した培養室と光照射用の暗室だけだった。先生達が入試問題の相談を学生の脇でこそそそ話し合っているのには本当に驚いた。10 年後の 1991 年に八王子キャンパスに移転してからも、「現状維持」という東京都庁の移転方針のために、多少良くなったと言え、我々の研究室は移転後も大したスペースの余裕は無かった。このような状況下では、研究材料がスペースを取らないシダの配偶体であったことは幸いであった。

1998 年 4 月から基礎生物学研究所制御機構研究系情報制御研究部門(客員部門)を使わせていただくことになり、本拠地よりも広い面積をいただけたので、都立大学ではできなかったことに挑戦することにした。それはシロイヌナズナを使って葉緑体運動に関する突然変異株を選抜し、葉緑体運動に関連した遺伝子をクローニングすると共に、運動のメカニズムを解明することだった。当時ポストドクだった加川貴俊君(現在筑波大学助教授)を初め、都立大の大学院生・及川和聡君、卒業研究生・熊沢光君、末次憲之君、林田恵美さんの 5 名に選抜をお願いし、基生研と都立大の両方で選抜を始めた。スリットを通して葉の一部に強光を照射する、というさんざん考えた挙句の選抜法は功を奏し、光受容体を明らかにするなど、幾つかの貴重な遺伝子が判明した。現在でもこれらの遺伝子を使った研究が我々の仕事の主要な部分を占めている。

都立大での研究成果も含めて、2001 年から 2003 年の 3 年間に Science と Nature に合わせて 5 報

を発表することができた。特に 2002 年の暮れから 2003 年初めにかけての 4 週間に Nature に 3 連発できたことは偶然とはいえ、我々自身も驚いた。何とも残念なのは 1 月 1 日号を逸したことである。

それにしても、5 年間という客員部門の成果としては希に見る出来であったであろうと、我ながら自負している。もちろんこれらの成果は、基生研に行ってくれた都立大の大学院生とポストドクの諸君、さらに共同研究者の方々のお陰である。これらの成果のためであろうか、御蔭さまで、勝木所長には客員の任期を 2 年間伸ばしていただき、2005 年の 3 月末まで研究をさせていただいた。

何時も思っていることだが、小生がシロイヌナズナを使うスペースも無い都立大学だけで研究を続けていたならば、今の成果も現状もあり得ない。繰り返しになるが、客員部門を使わせていただいたことにひたすら感謝する次第である。岡崎に足を向けて寝る訳にはいかない。そこで思うのだが、良いアイデアや、研究材料を持っていながら、研究環境が悪いために思い切って研究を進めることのできない研究者は多い。もし客員ポストを使えるようになれば、多大な成果を挙げ得る可能性を持った(小生のような)研究者は日本中のあちこちにいはずである。巨額な研究費を使って巨大な研究室を運営している研究者に客員部門をお願いすれば、基生研としての成果は上がるかもしれないが、ご本人にとっては大したメリットにはならないだろう。むしろ雑務が増えるだけかもしれない。本当に恵まれない研究者にチャンスを与える方が、真に意味のある客員ポストの使い方なのではないだろうか。何とか客員ポストを充実させ、日本の基礎生物学のレベルアップにつながるような客員ポストの使い方を望みたい。

スペクトログラフを使いに行き、三島ロッジに宿泊した際、さる客員教授から「俺は客員教授なのだから」と、寝る寸前に、シャワー付きの部屋からシャワー無しの部屋に移動を命じられたのも、今となっては懐かしい思い出である。